

中国の大学における日本語選択履修生¹の BELIEFS について

—日本語選択科目の改善を考える—

李 友敏

1. 研究背景

近年、中国で日本語学習がブームになって、学習者数の急増に従い、中国での日本語教育も盛んになってきた。中国の高等教育機関²における日本語教育は、専攻としての日本語教育（以下、専攻日本語教育とする）と非専攻としての日本語教育（以下、非専攻日本語教育とする）に大別できる。専攻日本語教育は学習者数が年々増え、大きな成果をあげた一方、これまでそれほど重要視されなかった非専攻日本語教育も注目され始めている。成（2006）によると、非専攻日本語学習者の数が64194人にも達している。中国の大学で非専攻日本語教育を受けている学習者は更に詳しく分けると以下の3種になる。

第1種は中学校以来日本語を第1外国語として勉強する学習者である。第2種は日本語を第2外国語として学習する英語学科の学習者である。これらの2種の学習者にとって、日本語は必修科目として勉強されている。

第3種は日本語を選択科目として履修している学習者（以下、日本語選択履修生とする）である。中国の大学において、外国語、経済、法律、心理学、芸術など多くの選択科目が設けられている。日本語はそのうちのひとつとして、多くの学習者に履修されるようになってきた。日本語選択履修生にとっては日本語は自由に選択できる科目である。

第3種の日本語選択履修生は数が多く、経済、社会、法律、教育学、数学、化学など様々な領域を専攻としている。また、履修生の不安定性もよく指摘されており、途中で放棄してしまう者は少なくないようである。にもかかわらず、中国の大学における日本語選択履修生は急増しつつ、非専攻日本語教育の今後の主要な対象になっていくと考えられ、無視してはいけない存在になってきた。また、数多くの大学で、日本語は選択科目（以下、日本語選択科目

とする）として学習者に履修されるようになったというのは事実である。

日本語選択科目は1クラスに当たる学習者数が多く、学習者の専攻や背景も様々である。学習期間から見れば、普通半年くらいで終わるという非常に短い時間である。担当している教師には若手教師が多く、日本人教師が配置されていないのが一般的である。また、日本語選択科目に向いている教材は少なく、しかも学習者の学習目的の多様化に対応できるとは言い難い。更に、日本語選択科目の科目設置は単一で、特に専攻日本語教育の科目と比べ、会話、聴解などの科目は一切ない。カリキュラムの設置も完備されていないように思われる。

上述したような特徴を見る限り、日本語選択科目はまだ様々な問題点を抱えていることが分かる。こういった日本語選択科目に対する早急な改善が望まれている。改善する際には、様々な要素を考えなければならないが、学習者が何を考えているかを知っておくのもその中の一つの要素だといえよう。したがって、本発表は日本語選択科目の改善の参考資料を作るため、これまであまり重要視されなかった日本語選択履修生に注目し、日本語学習についてどんな考えを持っているか、教師にどんな役割を望んでいるか、などに関わる日本語選択履修生の考え方を（BELIEFS）を明らかにする。更にこの調査の結果を元に、日本語選択科目の現状や問題点と照らし合わせ、どのような改善が必要かを考察していく。

2. 先行研究

2.1 BELIEFS とは

学習者が何のために目標言語を勉強しているか、言語学習をどのように進めればより効率的に習得できると思うか、教師に何を期待しているかなどに関わる考え方のことである（張：2004）。

2.2 BELIEFS に関する研究成果

Horwitz (1987) は 5 領域 (言語学習の適性/言語学習の難易度/日本語学習の本質/コミュニケーション・ストラテジー/言語学習の動機、計 35 項目) からなる BALLI³ を作り、成人 ESL (英語学習者) の調査を行った。調査報告の中で、学習者は言語学習に関して様々な BELIEFS を持っていること、学習者の BELIEFS を把握することが重要であること、などを指摘している。

板井 (1997) では、上海復旦大学日本語科の学生 37 名を対象に中国語版 BALLI を実施した。その結果、学習者は理科系が得意な人は外国語が得意で、中国人は外国語学習に対して適性があると思ひ、日本語学習の動機について、「日本語が上手になりたいという強い動機の他に日本人の友達がほしい、文化背景を理解したい、話せたら仕事や専門に有利だという明確な動機を持っている」と報告している。

BELIEFS 調査の目的は学習者の BELIEFS を知るだけでなく、それに基づいて日本語教育改善の方向を探ることにあると言えるだろう。学習者の BELIEFS から日本語教育の改善を考える研究には、和田 (2007) がある。

和田 (2007) は、日本語を勉強しているスリランカ大学生 86 人を対象に、BALLI 調査を行った。その結果、スリランカにおける日本語学習者は、コミュニケーション重視の教授法や教室活動、シラバスを望み、教師依存の傾向が強く、教師に強い信頼と期待を寄せているということが分かった。更に、この結果を元に、1) 信頼に足る日本語能力を持った教師の養成、2) コミュニケーション能力育成に焦点を置いた教授法導入のための教師研修、3) 様々な日本文化に触れる機会の提供、という 3 つ日本語教育への改善策を提案している。

和田 (2007) では、BALLI を通し、学習者の言語学習に関する BELIEFS を明らかにした。しかも、BELIEFS 調査の結果をある程度日本語教育の改善に生かしている。本発表では、この研究の考え方に基づき、中国の大学における日本語選択履修生が日本語学習に関する BELIEFS を把握することで、今の日本語選択科目の改善を考察していく。

3. 研究目的

本発表では、これまであまり重要視されなかった中国の大学における日本語選択履修生に注目したい。

中国の大学における日本語選択履修生は、日本語学習に関してどのような BELIEFS を持っているかを報告することで、今後の日本語選択科目に対する改善のための資料を提供することを目的としている。また、日本語選択履修生の BELIEFS を知り、同時に日本語選択科目の現状や問題点と照らし合わせることによって、簡単ながらどのような改善が必要であるのかを考察していく。

4. 調査方法

BALLI を参考にし、大きく 1) 言語学習の適性、2) 日本語学習の本質、3) コミュニケーション・ストラテジー、4) 日本語学習の動機、5) 教師の役割、6) 学習者の自律性、7) 教材・教授法・カリキュラムの設置、という 7 領域の中国語版調査紙を使い、調査を行う。回答方法は、各々の項目に対し、「強く賛成」から「強く反対」までの 5 つの選択肢から学習者自身に最も相応しいものを 1 つ選択させるという形で行った。

5. 結果及び考察

調査した 7 領域に関してそれぞれの集計結果を表にした。各々の項目において平均値や標準偏差 (SD) を求めて表に記した。表 1 から表 7 までは平均値の小さい方から大きい方へ配列した。

5.1 言語学習の適性

表 1 言語学習の適性についての BELIEFS

質問項目	平均	SD
1 ある人は外国語習得の特別な才能を持っている。	1.87	0.83
2 私は外国語学習の特別な能力がある。	3.22	0.92

表 1 から、外国語を勉強するとき、ある人は特別な才能を持っている (項目 1: 平均 1.87) と認めながら、自分の外国語能力について特に強い思い込みが見られない (項目 2: 3.22) ことが分かる。

5.2 日本語学習の本質

表 2 日本語学習の本質についての BELIEFS

質問項目	平均	SD
1 日本語を学習する時、最もいい方法は日本語話者から学ぶことだ。	2.3	0.82
2 日本語は日本で学習するのが一番いい。	2.4	0.99
3 非母語話者と日本語を話すのは興味がない。	3.7	0.89

日本語を学習する時、日本語母語話者から学ぶのが一番いい (項目 1: 2.3) と思う傾向が強いが、非母語話者との日本語でのコミュニケーションにも

意味がある（項目 3：3.7）と捉えている。これが非常にポジティブな BELIEFS だといえよう。なぜかというと、海外の日本語教育は日本国内の日本語教育と違い、学習者は日本語母語話者に接触する機会はなかなか見つけにくい状態なので、積極的に周りの状況を生かして、非母語話者と日本語を交わすことによって、ある程度の練習になれると思われる。

5.3 コミュニケーション・ストラテジー

表 3 コミュニケーション・ストラテジーについての BELIEFS

質問項目	平均	SD
1 大量の反復練習が重要だ。	1.64	0.70
2 正確な発音で日本語を話すことは重要だ。	1.67	0.71
3 時間がかかってもやさしい文型から難しい文型へと徐々に積み上げて学習していく方が最終的には実力がつくと思う。	1.82	0.68
4 単語や短い文を暗記することは重要だ。	1.85	0.66
5 カセットテープによる練習が重要だ。	1.95	0.65
6 初級の段階で誤用が許されるとしたら、後で正確に話すことが難しくなる。	2.63	1.16
7 正しく言えるようになるまで何も言っていない。	3.70	1.96

表 3 から分かるように、履修生は時間がかかってもやさしい文型から難しい文型へと徐々に積み重ねていくほうが実力がつく（項目 3：1.82）と強く信じ、「大量の反復練習（項目 1：1.64）」「単語や短い文の暗記（項目 4：1.85）」「カセットテープでの練習（項目 5：1.95）」は重要だと考えている。また、正確な発音で日本語を話すことは非常に重要だ（項目 2：1.67）と捉え、「初級段階で誤用が許されるとしたら、後で日本語を正確に話すことが難しくなる（項目 6：2.63）」についてははっきりした傾向が見られなかったが、やや賛成よりである。しかし、それは決して正しく言えるようになるまで何も言っていない（項目 7：3.7）というわけではない。

5.4 日本語学習の動機

表 4 日本語学習の動機についての BELIEFS

質問項目	平均	SD
1 日本語を上手に話せるようになりたい。	1.61	0.66
2 日本語を学習したら、就職に有利である。	2.19	0.79
3 日本人の友達が多い。	2.32	1.04
4 日本語が就職に有利なら、専門で大変役に立つ。	2.56	1.05
5 日本語の文化背景を理解したい。	2.91	1.03
6 日本人とコミュニケーションをするのに役立つ。	3.08	1.01
7 日本人をより理解したいので日本語を勉強する。	3.15	1.00

全体から見れば、「日本語を上手に話せるようになりたい（項目 1：1.61）」と「就職に有利だから

（項目 2：2.19）」という 2 つの動機は明らかであるが、それ以外の動機はばらつきが大きいことが分かった。履修生は日本語を上手に話せるようになりたいという強い学習動機を持っている一方、それは必ずしも日本人をより理解したい（項目 7：3.15）から、日本人とコミュニケーションをするのに役立つ（項目 6：3.08）からだというわけではない。

5.5 教師の役割

表 5 教師の役割についての BELIEFS

質問項目	平均	SD
1 教師に日本語の勉強方法やポイントを教えてほしい。	1.65	0.61
2 教師に自分の日本語学習上の問題点や困難な点を教えてほしい。	1.93	0.61
3 日本語学習に成功するには、教師が必要である。	2.12	0.81
4 教師に学習到達目標を設定してもらいたい。	3.05	0.99
5 教師は学習者を一生懸命学習させなければならぬ。	3.50	0.91

表 5 のように、履修生は教師に学習方法（項目 1：1.65）や問題点の指摘（項目 2：1.93）などの役割を求め、日本語学習にいい教師が必要だ（項目 3：2.12）と捉えている。一方、項目 4 と 5 を見れば分かるように、自分の学習プロセスを管理して学習を進めることに対して肯定的な見方を持っている。日本語学習は自分が責任を取るべきだと捉えている。

5.6 学習者の自律性

表 6 学習者の自律性についての BELIEFS

質問項目	平均	SD
1 間違いを自分でチェックする時、一番学習できる。	1.60	0.89
2 はっきりとした目的があれば上達が早くなる。	1.88	0.67
3 計画を立てて勉強すれば日本語の上達が早くなる。	2.00	0.65
4 日本語を学ぶ時、教師の助言を求めるのが好きだ。	2.05	0.69
5 教師の言う通り勉強すれば上達が早くなると思う。	2.33	0.79
6 自分の日本語学習のどの部分を改善すべきかわかっている。	2.37	1.00

日本語を勉強する時、教師に助言を求めることが好き（項目 4：2.05）で、教師の言う通り勉強すれば上達が早くなる（項目 5：2.33）と信じている一方、間違いを自分でチェックする時一番学習できる（項目 1：1.60）と強く賛成していることは注目すべき点である。ほとんどの履修生は「はっきりした目的」や「計画を立てること」の重要性を十分に認識し、また、自分の日本語学習のどの部分を改善すべきかわかっている（項目 6：2.37）。

5.7 教材・教授法・カリキュラムの設置

履修生にとって、日本語を読んだり書いたりする授業より、話したり聞いたりする授業が望ましく

(項目 5 : 2.33)、会話中心のカリキュラムが最もい

表 7 教材・教授法・カリキュラムの設置についての BELIEFS

項目	質問項目	平均	SD
1	教科書をもっと実生活に近いほうがよい。	1.67	0.60
2	自分をもっと日本語で話したい。	1.81	0.66
3	教科書以外のものも教えてほしい。	1.88	0.88
4	会話中心のカリキュラムをもっとほしい。	2.22	0.82
5	日本語を読んだり書いたりする授業より、日本語を話したり聞いたりする授業が望ましい。	2.33	0.86
6	教科書を使わずに頭だけの練習は自分に向かない。	2.36	1.10
7	テキストに基づいた授業がいい。	2.88	0.89
8	日本語を上手に話せたり聞けたりするようになるには、今の授業だけで十分である。	3.72	0.84

い(項目 4 : 2.22)。しかし、今の授業だけでは、自分の日本語を上手に話せたり聞けたりするようになるには十分(項目 8 : 3.72)ではなく、自分をもっと日本語で話したい(項目 2 : 1.81)という強い傾向が出てきた。一方、教科書をもっと実生活に近いほうが有難く(項目 1 : 1.67)、教科書以外のものも学びたい(項目 3 : 1.88)という強い要望を持っている。また、「教科書を使わずに頭だけの練習は自分に向かない(項目 6 : 2.36, SD (1.10))」についてばらつきが見られるが、やや賛成よりという結果になっている。これに対し、「テキストに基づいた授業がいい(項目 7 : 2.88)」について、半分近くの学習者は「どちらでもない」を選んだ。

6. 履修生の BELIEFS と日本語選択科目の改善

中国の大学における日本語選択履修生の BELIEFS の傾向をまとめると、以下ようになる。

- ①教師を必要としている一方、主体的学習を望んでいる傾向も強かった。また、履修生の学習への自律性が非常に高いことが分かった。
- ②多くの履修生は文型積み上げ型、反復練習型などの伝統的な学習方法に慣れているが、コミュニケーション重視の教授法やカリキュラムを望んでいる傾向も強かった。
- ③教科書はすべてではないが、履修生のよりどころで、彼らを安心させる不可欠な存在になっている。
- ④日本語は母語話者から学ぶのが一番いいと思う傾向が強いが、非母語話者との日本語でのコミュニケーションにも意味があると捉えている。

以上の BELIEFS の特徴を元に、今の段階で考えられる改善案を以下のように挙げてみる。

- 1 学習者の主体的認識や自律性を生かせる授業

の開発

- 2 伝統的な教授法を尊重しながら、コミュニケーション重視の教授法の導入
- 3 日本語を話す場の提供

6. 今後の課題

本発表では、これまであまり重要視されなかった中国の大学における日本語選択履修生を対象に、BELIEFS 調査を行った。今回の調査は BALLI を使ってアンケート調査を行った。BALLI 調査研究で必ず問題になるのが、各項目に対する意味解釈が被調査者によって同じとは限らないという点と、調査結果に対する考察はあくまでも筆者によって解釈しているという点である。より客観的な解釈ができるように、アンケート調査の後、フォローインタビューなどを行う必要がある。これは今後の課題とする。

注

1. 本発表では、選択科目として中国の大学で日本語を学習している学習者を日本語選択履修生と呼ぶ。
2. 教育段階別から見れば、2000 年代に入り、初等・中等教育機関で学習者数が減少しているものの、高等教育機関では学習者数の大幅な伸びが見られる。
3. BALLI (Beliefs About Language Learning Inventories)

参考文献

- [1] 板井美佐 (1997) 「言語学習についての中国人学習者の BELIEFS - 上海復旦大学のアンケート調査より -」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集 12』筑波大学留学生センター 63-87
- [2] 張美淑 (2004) 「第二外国語として日本語を学ぶ韓国の高校生日本語学習についてのピリフ - 教室での応用に向けて -」 東京外国語大学修士論文
- [3] 橋本洋二 (1993) 「言語学習についての BELIEFS 把握のための試み」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集 8』筑波大学留学生センター 215-241
- [4] 若井誠二・岩澤和弘 (2004) 「ハンガリー人日本語学習者のピリフス」『日本語国際センター紀要』第 14 号 国際交流基金日本語国際センター 123-140
- [5] Horwitz Elaine K. (1987). Surveying Students Beliefs About Language Learning. 103-117. In Anita Wenden & Joan Rubin (eds.), *Learner Strategies in Language Learning*. USA: Prentice-Hall, 119-132

り ゆうびん / 北京日本学研究中心
言語教育コース
liyuminjp@yahoo.co.jp